岐阜大学教育学部研究報告　教育実践研究　第12巻 (2010)

体験からの学びに基づく道徳授業の探究

A Inquiry of Moral Teaching based on Learning through Experience

西村文子・柳沼良太

Fumiko Nishimura / Ryota Yaginuma

はじめに

現在を生きる児童・生徒に求められるのは，自ら学び考え判断し行動する力である。こうした自由で主体的な思考を育成するためには，自ら取り組んだ課題や身をもって体験したことと関連づけて学習することが重要である。特に道徳授業では，道徳的価値を実現するために適切な行為を主体的に選択し，実現することができるような内面的資質としての道徳的実践力を育成する必要がある。こうした道徳的実践力は，自ら考え行動する力を育てる継続的な指導によって育むことができる。

また，道徳授業は日頃の生徒の生活経験と関連させていなければ，一方的な教え込みになってしまう。道徳授業は生徒の生き方に深く結びつき体験に基づいて実感される時，道徳的価値道の自覚が深まると考えられる。こうした道徳授業では，過去の経験を振り返るだけでなく，将来の生活に真に役立つものでなければならない。心に残るとともに充実した学びの生まれる道徳授業を創り出すために，体験からの学びを道徳的価値の自覚につなげていく授業の在り方について考察することにする。

以上の観点をふまえて，本稿では中学校における体験からの学びに基づく道徳授業の在り方を検討することにする。本稿の内容構成は以下の通りである。１節では，学校における体験活動を取り入れた道徳教育のあり方を概観する。２節では，中学校における道徳教育の実態から道徳の時間の課題を明らかにする。３節では，体験と道徳授業の関連について考察する。４節では，人間としての生き方を学ぶ道徳授業について検討する。５節では，道徳授業の実践例をアクションリサーチとして紹介する。最後に，体験からの学びに基づく道徳授業を系統的に構成する意義について吟味したい。

1　体験活動を重視した道徳教育

学校における道徳教育は，道徳の時間を要として，各教科をはじめ特別活動や総合的な学習の時間と関連づけながら体験活動を取り入れて総合的な取り組む必要がある。道徳の時間に体験活動を行うことは実質的にできないが，特別活動や総合的な学習の時間では体験活動を行い，道徳的実践を行うことができる。

また，道徳の時間が一週間という期間を空けて行うのは，その間に生徒が道徳的価値について見つめ直すためであると考えられる。体験を通して道徳的実践力を身に付けるためには，日常生活においても道徳的価値についての学びを促す学習が必要となる。

さらに，このような学校全体で取り組む体験活動をふまえて，学級担任は道徳の時間において生徒が道徳的価値の自覚を深められるよう創意工夫しなければならない。日頃の学級経営での道徳的実践がどこまで行えているかを踏まえ，生徒の道徳的実践の実態を捉えた上で道徳授業を行うことが大切である。日常生活では，学級で目に付いた道徳的な問題に関わる出来事のみではなく，一人一人が感じている道徳的な問題につながる違和感や葛藤などを踏まえることが重要である。

2　道徳教育の実態と課題

筆者（西村）は陽南中学校において道徳授業を中心に全教育活動を通した道徳教育についてアクション・リサーチをした。この教育実践研究を通して捉えた中学校の道徳授業の実態を以下に述べる。

本校では「仲間意識を大切にした学級経営」，「教科で思いやりをはぐくむ道徳指導」が日常的に行われている。このような道徳教育を基盤として行われる道徳授業は，内容項目に偏りがなく，かつ生徒の実態を踏まえた年間指導計画を

基に行われている。年間指導計画では，毎年同じ資料を扱う時間だけでなく，「試みの道徳」を行う時間がある。各道徳の時間は特定の生徒に的を絞った指導展開で，統一した板書の形式がある。毎時間，生徒に振り返り用紙を記入させる。資料と振り返り用紙は，生徒が一人ずつ綴りにし，教室に保管している。また，４月からの道徳の資料を教室に掲示している。

学校における教科の指導を通した日常的な道徳教育は，生徒の道徳性の育成のために欠かせない。ここでの体験からの学びを通して道徳性がはぐくまれる。教科指導を通した道徳教育について，具体的にリサーチした教師の指導や生徒の様子を以下に述べる。

２年３組の家庭科では，生徒たちの調理実習の様子から，班の仲間で助け合いながら時間を意識した活動をしている。教師が他の学級よりも良かった点を話したりすることで一層意欲が引き出されている。良い行動が見られたときにはすぐに認めて価値付け，日常の中で道徳的な価値を身につける基盤を育てている。このように，道徳的実践力は，見て覚えて実行することが大切であり，説明するだけでなく見てすぐやらせることで，頭の中に残りやすい。２年１組の社会や英語では，仲間との関わりを大切にした授業がされている。社会では課題に対する考えを班で交流し，英語では男女ペアでの活動や班での交流がよく取り入れられている。これらの活動を通して，生徒たちに，仲間を思いやったり，力を貸しあったりすることを実践的に行えるように工夫されている。生徒は，何度も仲間と活動を行う中で，共に学び，仲間を思いやることの価値を自然と実践力として身につけていくことができる。

道徳教育では，「基本的な行動様式の理解と習慣づけ」によって「道徳実践力」を身につけさせることを目的としている[1]。教科の中では，グループ活動の中で自然な形で思いやりを実践的に身に付けることができる。また，道徳授業では実践する時間がとれない分，日常的に生徒の行動を価値づけ，実践する意欲につなげる。日常的な教科の授業で道徳的実践の場を教師が意識して生み出すことで生徒の道徳実践の機会が充実する。このような活動の場の設定と教師の助言・援助によって，生徒の中で道徳的実践を行う意欲が引き出され，道徳的価値の自覚を深めていくことができると考えられる。生徒一人一人の学習を大事にしながらも，仲間と関わりを持たせる時間を設けたり，学習と関わって道徳的価値について考えさせる時間を設けたりする工夫が必要になる。

学校では学級を中心に学習や生活が行われ，そこでの仲間との関わりによって道徳性が育っていく。学級活動と関連した道徳教育については，具体的に以下のような学級活動の中で見ることができる。

２年１組では，学習評価の日の朝の会で，教科係が各教科のめあてを話し，学習でこだわりが出せるように学級の仲間に呼びかけている。学級の生徒一人ひとりの意識を高め，自分の目標をしっかりと見直せるようにするためである。生徒が自分の役割を意識して，他の仲間に自分の思いを伝え，共に頑張ることを呼びかけている。学級経営では，生徒が互いに高まっていくように呼びかけることを大事にすることで，学級集団の中で自分の成長を感じられるように工夫されている。学級活動に力が入れられている学校では，教師や生徒の意識が高い。学級は環境であり，学級集団が高まれば，一人ひとりの生徒の意識も高まる。学級の仲間を大切にすることを目標にして活動する中で，思いやりの心を育て実践を身につけていきやすい。教科の学習目標を達成するために，仲間と協力していこうとする姿，黙って見過ごすのではなく仲間に対して指摘する姿が見られる。このように，目標に対して真剣に取り組む生徒を中心に，学級全体に広めることで，生徒一人ひとりが役割や協力の価値を実践することができていく。

道徳の時間は，抽出生徒を決めることで，ある道徳的価値に対して，指導案の作成段階で生徒の発問に対する反応をより具体的に予想し，生徒の実態に合うように道徳授業が工夫されている。このような道徳授業では個々の生徒に対しての指導の効果が高くなると考えられる。ただし，この場合に留意することが二点ある。第一に，的を絞ることで一人の生徒に道徳的価値を何とか身に付けさせようと教師が必死になってはいけないことである。第二に，内容項目の捉え方の曖昧さと偏りをなくすことである。ねらいとする価値が十分でないという視点から抽出生徒を決めるのではなく，生活体験の不足からであると考えることで，ある道徳的価値に対

して前向きでない生徒に対して無理に教師が身につけさせようとすることを防ぐことができる。道徳の時間は，今後の生活で道徳的価値を自覚するための出発点となることも大事な役割である。また，ねらいとする価値を，内容項目そのままとして捉えるのではなく，よく吟味しておくことが重要である。教師の価値観も偏ったところがあり，体験も限られていることから，価値の捉え方について複数の教師で交流する機会を持つことなど，いろいろな見方で価値を捉える努力が求められる。価値の捉え方に複数の視点を取り入れ，教師一人の価値の捉えだけでなく，いろいろな見方で捉え直すことは今後，重要性が高くなるだろう。

中学校においては，生涯にわたってよりよい人間としての生き方を考えていこうとする意欲を育てることが大切になる。そのために，身近な生活における道徳的価値に関わる「気づき」を大事にし，よりよい生き方と関わらせて考えていけるように配慮する必要がある。まず，基盤として，道徳の時間において道徳的価値を理解できるようにしなければならない。人間は，体験を通して新たな価値を学び自己を成長させると考えるが，そのような体験をそのまま道徳の時間に行うことが道徳の時間の目的ではない。体験の中で「気づき」ができるように，物事に対する道徳的な見方を広め深めていく学習，道徳資料による疑似体験や追体験を通して，そこに示されている価値に気づき，自分の体験を改めて振り返ることができる学習が大切である。

体験的な学びを取り入れた道徳授業を行うために留意すべきことは，心から揺り動かされ自分の生活でも実践したいという意欲を持てるようにすること，生徒が抱える問題を解決するのに役立つ時間にすること，授業に参観する意欲を引き出すこと，道徳的価値を様々な見方で考える時間を作ることである。心から揺り動かされ自分の生活でも実践したいという意欲を持てるようにするために，中学生が自分の生き方について真剣に考え始めるという特質を踏まえ，先人や現在に生きる有名人の「生き方」に触れることも大切である。生徒が抱える問題を解決するのに役立つ時間にするために，生徒が自分の抱えている問題を思い起こし，その解決の仕方を学べる時間にするのである。また，授業に参加する意欲を引き出すために，生徒が頭で理解している道徳的価値を基にして価値付け，それをさらに深めていけるような発問をし，十分に理解している道徳的価値を実践していく意欲を引き出すようにする必要がある。自分の生き方と結びつけて考えられるように，授業の前半に道徳的価値を捉え，後半には価値観の交流ができるように，グループや学級全体で話し合う場を設定するべきであろう。

3　生活体験と道徳授業との関連性

道徳授業では自らの生活体験を重視する必要がある。自分の生活体験を出発点とすることで，道徳的価値を実感でき，そこで得られたことは身につきやすい。さらに，そこで得た充実感は新しいことへ向かっていく意欲を生み出すことにもなる。そこで，道徳資料の出来事を他人事として捉えるのではなく，新たに学ぶことができる価値があるものとして生徒の学ぶ意欲を引き出さなければならない。以上をふまえて，生徒の体験を基にした道徳授業の指導と援助の在り方を考える。

まず，道徳授業は，日々の道徳教育を補足し，その意義を深化させ，統合的に道徳的価値を学ぶための時間とする必要がある。道徳授業だけで道徳性を育成することは不可能であり，それ以外の時間の様々な体験の中での気付きを大切にしなければならない。生きることにかかわる価値は，言葉で教えられるより前の，日常的な体験の中での気付きが出発点であると考えられる。体験の中で曖昧な形でしかなかった気づきが，似たような体験を通して改めて考えてみることで，新たな価値として学習されていくのではないだろうか。日常的な体験以上に，まとまった形の体験活動は，生徒にとって新鮮で印象に残りやすい。しかし，そのような体験活動も，日常の出来事に関心を持って取り組む態度がなければ，体験からの学びにつながらない。教師は，生徒が日々の体験に対して，どう感じているか，どう向き合っているかを把握しておく必要がある。教師にとっても，日々の生徒に対する気づきが，道徳授業を充実させることに繋がると言える。

次に，道徳授業を生徒の生活体験と関連させることが重要になる。道徳授業では生徒が自分の生き方に関わる価値について学ばなければならないが，ただ教師の話を黙って聞き，国語の

時間のように人物の気持ちを理解するだけでは，生きた道徳的価値を習得することができない。生徒が道徳授業で道徳的価値の自覚を深めるのは，自分の体験と関連した印象的な授業のときである。そこで，授業の導入では，生徒が自分にとって関係し，意味があると感じられることが大切になる。生徒にとってはどの道徳的価値も本来は意味があるものであるが，実際は感覚的に「つまらない」と感じてしまったり，そのときの心理状態に左右されてしまったりして，本当は意味があるはずの授業に取り組むことができないことも多い。これを改善するためには，以下に示すように，生活体験を基にした道徳の時間における学びを促すことと，道徳授業の学びを生活に生かしていくことの２点が重要になると考えられる。

（１）生活体験に基づく道徳授業

生徒は日常生活において様々な道徳的価値に触れ，感じ，考え，道徳的実践を行う。その喜びや困難さなどを味わいながら自ら道徳性を身に付けていけるような体験を生活体験と呼ぶ。生活体験を道徳の時間の学びへ生かしていくため，教師には道徳的価値についての吟味と多角的な把握が求められる。生徒の生活体験との整合性を検証した上で，価値について色々な立場や条件から見直してみる。生活体験自体の不足や，理解できていても立場や条件が限定されたときにしか実践できないことを課題点として捉える。また，生徒はさまざまな生活体験をしてはいても，記憶に残っているものばかりではないだろう。生徒自身が意識しないで行った行動で教師が気になる行動もある。この場合，この抽出生徒に何らかのきっかけを与えて気づかせることがまず必要になる。学級集団に学び合う雰囲気があり良好な状態の場合，学級全体の雰囲気に左右される生徒は多くことを踏まえ，抽出生徒に気づかせる手立てを行うことができると考えられる。

＜指導案１＞

① 主題名

内容項目４－（３）「社会連帯の精神」

民主的な社会の基本的な価値である社会正義の実現に努め，正義を重んじ，誰に対しても公平・公正に接し，社会連帯の精神を持って差別や偏見のないよりよい社会の実現尽くす。

関連項目：内容項目２―（５）「寛容・謙虚」

② 主題設定の理由

第２学年に集団宿泊的行事があり，仲間との交流や集団生活のために必要なことを実践できる特別活動になっている。この行事は集団生活向上の価値を実践的に身につけるのにふさわしい。この行事の後では，体験として得た集団生活の規範を持続させられるように指導が行われる。また，生徒にとっても，仲間と共に活動した体験はその後の生活に印象深く残るものになるだろう。そこで，この事後指導として，「社会連帯の精神」の道徳的価値に導くことをねらいとして道徳授業を行う。集団宿泊行事では，仲間と役割分担をして協力する場面がある。そこで起こりうる問題の解決策を考えることを通して，「寛容・謙虚」の道徳的価値を基盤としながら，社会連帯の道徳的価値の自覚を深めることをねらいとする。

③ 資料について（「修学旅行のできごと」）

この資料は，集団宿泊行事として修学旅行を取り上げ，班での自由行動中の問題場面を中心にしている。最初の場面では，班の男女が仲たがいする。その状態のまま当日を迎え，自由行動では男子が計画を無視して別行動を提案し，女子はそれを受け入れる。待ち合わせの時間を決めたが，その時間になってもいっこうに姿を現さない。そのとき先生に見つかり，男子がなかなか戻ってこないことを打ち明ける。男子たちは，先生から身勝手な行動をしたことを叱られる。この資料での道徳的な問題点は，男子の身勝手な行動だけでなく，それに対して女子は，男子だけが悪いと思って先生に訴えていることである。

できごと	主人公の気持ちの流れ
① 修学旅行前，男子と女子が対立していた。男子は計画を立てるのに参加せず遊んでいる。	反発「なんで男子は遊んでばかりで協力してくれないのだろう」
② 当日，自由行動の時間に，男子が別行動の話を持ちかける。待ち合わせ時間を決める。	無関心「好きにすればいい，別に行動する方が自分も楽」
③ 待ち合わせ時間になってもいっこうに男子が現れない。先生に見つかり事情を話す。	不満，怒り「待ち合わせ時間に来ないなんて信じられない。」
④　男子が先生に叱られる。時間が遅れ計画していた場所にいけなくなった。	疑問，違和感「男子だけが怒られてよかったのかな。」

発問
① 私は男子の行動に対してどう思っているだろうか。
② 私はどうして別行動を受け入れたのか。
③ 私は先生に対して男子だけが悪いことを伝えているが，本当に男子だけが悪かったか。
④ 誰も嫌な思いをしないようにするには，当日までにどうすることができたか。

④　指導展開

生徒には，自分にも同じように，自分の属する仲のいいグループ以外の，仲が良くない相手に対しては，無関心になり非協力的な態度をとってしまっていなかったかを振り返らせたい。そのために，中心発問として，このような問題を未然に防ぐことはできなかったかを生徒に投げかける。当日までの登場人物の行動の問題点に気づかせ，どのように行動すればよかったのかを話し合わせることで，同じような場面での具体的な行動の仕方を考えさせたい。

（２）道徳の時間とその後の生活との関連

生徒が生活体験を思い出しながら，道徳の時間で生き方について学べるようにする。道徳の時間で他人の体験した価値に触れることで，その後の生活の中で生き方の手本として直接役立てることができたり，自分の生き方に新たな価値観として取り入れたりできるようにする。生徒が，資料を通して出会う人物の生き方から学べるようにする。実際に体験したことを思い出しながら，資料の中にある道徳的価値について深く考え，自らの在り方や生き方を見つめられるようにする。さらに，人間としての生き方について，自らの生き方とかかわらせながら考えていけるようにする。様々な場面における道徳的価値に関する価値葛藤や価値を実現する喜びや困難さ等を，読み物資料や視聴覚資料，新聞記事などに描かれる場面をイメージし，あたかも自分がその場にいるような形で状況を捉えた上で，自分の関心を持つ場面や共感できる場面で，考えを深めていくように授業を進める[(2)]。

＜指導案２＞

① 主題名

「社会連帯の精神」，関連項目「感謝・思いやり」

② 主題設定の理由（ねらいとする価値について）

集団や社会の成員としての自覚は，学校行事などの体験的な学習と大いに関係する。年間指導計画では１月に学年文化交流会が位置づけられている。この学年交流会では学級独自の活動の成果を発表する。この行事の日程を踏まえ，学級独自の活動を行う事前指導として，内容項目４－（３）の道徳授業を行うのが適切であると考えた。社会連帯の精神の基盤は，自分の損得ではなく，身の回りの人の生き方を尊重していく態度を身に付けることだと考える。この道徳的価値へ生徒が自ら向かっていくために，「寛容・謙虚」の価値を扱った道徳授業を行い，周りの人の生き方を尊重する態度を育てたい。

③ 資料について

資料名「思いもよらぬできごと」塩野真理子作

この資料では，主人公がある年上の女性と出会い，その人の思いの深さや人間性へ尊敬する場面がある。人を尊重し互いに助け合うことの価値に気づくことのできる資料である。

できごと	主人公の気持ちの流れ
① 私はアルバイトに遅刻しそうになり，慌てて走って駅に着いた。切符販売機の前の長い列に並んでいると，私の前に並んでいた女性は自分の番になっても切符をなかなか買おうとしない。	早くしないと遅刻してしまう。このおばさん，早くしてくれないかな。
② 目の前の女性は，お金が一万円しかなく，切符販売機で使えないので困っている。私は足りない二百円を差し上げた。	遅刻だけはしたくない。このおばさんに早く切符を買ってもらうために，お金をあげよう。
③ ２週間後，改札を通り過ぎようとした私に，あの時の女性が現れ，お礼をしてくれた。	たった二百円のために…。自分のために出したお金だったのに，わざわざ私を探して御礼をしてくれた。
④ 電車の中で私は，思いがけないできごとに涙を流した。	さびしい思いをしていた私に，こんなに温かい心で接してくれた。
発問	
① 慌てているとき，長い列に並んでもう少しで自分の番。前の人が早くしてくれなかったら，どう思うかな。	
② 私がこの女性のために足りないお金を払ったのは，どんな気持ちからかな。	
③ 私にとって，自分が出した二百円に対して，この女性がしてくれたことはなぜ「思いがけないこと」だったのですか。	
④ 私は，この女性のどんなところをすばらしいと思っているのでしょう。	

④ 生徒の実態について

男女の仲は良く，学級集団の結束力も高い。学級委員や学級の中心的な役割を持つ仲間の意識が特に高く，学級目標を意識して活動に取り組む姿勢が基本的に身についているといえる。学級全体の話し合いでは，しっかりと考えを言える生徒が多い。

しっかりした優等生の女子生徒や，仲間に対して一生懸命に呼びかける女子生徒がいる。一方で，そこまでの思い入れがなく，話し合いでは進んで意見を言おうとしない生徒もいる。自分の意見を言わない生徒は，日常の様々な場面では，その生徒にしかない長所を持っていることがわかるが，進んで意見を言わないことから周りに理解されにくい。

学級があと少しで解散の時期になり，２年生へ向けて，「社会連帯の精神」を身に付ける素地を養っていかなければならないと考える。

進んで意見を言わない生徒は，集団で話し合う場では，全体の意見に合わせてしまうことが多いが，納得した上で周りに賛成できるように意識を高める必要がある。一方，自分の意見をしっかり持っているものの，周りに合わせて進んで意見を言おうとしない生徒がいる。このような生徒は，自分の意見がもしかしたら周りには受け入れられないのかもしれないと感じているため，意見を言おうとしないのかもしれない。自分の学級に対する思いを伝え合っていくには，仲間のよさを認め互いに尊重し合う価値の自覚を深めることが必要であると考える。

4　人間としての生き方を学ぶ道徳授業

生活体験と道徳授業で相互に補いながら，生徒が道徳的価値を自覚したり新たな価値観を学んだりし，生き方について深め，実践力を高めていくことが大切になる。実践力を高めるには，協同と自覚が大切である。生徒が道徳的実践力を身に付けていくためには，生徒自身が直面する課題に対して対処していく過程において，他者と協力して道徳的実践を行う活動が重要である。仲間と共に励ましあったり指摘しあったりしながら目標に向かって連帯する中で，一つの価値を追求することの喜びや，その結果についてみんなで責任を持つことの大切さを感じ取ることができるからである。

このような過程を含む体験を道徳的実践力の育成に結びつけるには，体験を経験化する道徳の時間が重要である。活動で得た感動体験・達成体験は，そのままであれば価値は生徒の心に内面化されないからである。このような体験を生徒の中で道徳的価値として自覚させることが重要である。生徒のあるがままの人格や個性の中では体験は無秩序なものであり，一般的な道徳的価値とは呼ぶことができないものも多いからである。学級の仲間と協力した体験が道徳的実践力として生徒に身につくように，体験を経験化する道徳的な学習が必要になる。経験化するには，「共感・判断・意味づけ」[3] という視点を大切にして指導に当たる。

道徳授業の中で，生徒に，ある人物の「生き方」に出会わせ価値観に触れさせ，自分の生き方を見つめ直し，よりよりよい人間としての生き方を考えられるようにする。

「生き方」を取り上げた道徳授業での活動の設定と取り上げる生き方について述べる。まず，生き方との出会いから人間としての生き方を考えられるようにする。例えば，道徳授業の終末の振り返りの場で，「自分のこれからの生活で生かしていくこと」を問いかける。これを何度かの授業で行い，普段は自分の生き方をあまり考えたことのない生徒に自覚を促すことが必要になるだろう。生徒が今の自分の生き方を，出会った生き方と比べて振り返るようにしていくことで，授業で出会った道徳的価値が一人の人間の生き方と結びついた価値として自覚されると考えられる。また，生徒が自分のよさを再確認するとともに，生き方を考えるときの複数の価値の広がりや自分が持っている価値の深まりに結びつけられるようにする。例えば，資料で出会う偉人の生き方が，自分たちにも共通する価値から成り立っていることに気づけるようにする。

取り上げる生き方は大きく分けて２つある。一つ目に，かけがえのない自分や他者を大切にしてよりよく生きようとする具体的な人の姿を取り上げることである。例えば，お互いに助け合いを大切にしながら生きている，中学生よりも年上で身近な祖父母や地域の人の生き方を取り上げる。二つ目に，自らの生において願い実現している思想や言動，振る舞い，あるいはそれらが蓄積された人生の歩みを取り上げることである。例えば，偉業を成し遂げた人が，苦難にあったときの逸話を取り上げる。

このような生き方を取り上げるに当たって，三つの価値領域から検討する[4]。一つ目に，自分を必要としている物・人・こととの交わりを大切にして生きている人の生き方（体験価値）であるかどうかである。自分が生きる中で関わる人やものに自ら関わり，そこから得たことを大切にしている人を主人公にし，体験から成長する場面から，人は周囲との関わりの中で変わることができるという生き方の価値を自覚できるようにする。二つ目に，自分に期待されている仕事を実現しようとして生きている人の生き方（創造価値）であるかどうかである。自分の社会的な役割と個人的な願望との間で揺れ，最後には期待されている仕事を自分の生きがいとするまでに高めた人の原動力となっている価値に気づけるようにする。三つ目に，変えようのない状況を前に，取りうる態度で生を実現しようとしつつ生きている人の生き方（態度価値）であるかどうかである。どんな状況であっても，生きる主体である自分の態度が最も肝心であることに気づけるようにする。

5　道徳授業のアクション・リサーチ

生徒に今までの生活体験を基盤にし，今後の生き方を考えていけるようにするため，２年生の総合的な学習で行われている体験学習と関連付けて道徳性の発達を促した教育実践を次に紹介したい。

陽南中学校の総合的な学習の時間は，生き方を考える精神を生徒が持てるようにするという点で，道徳性の育成に深い関わりがある。一年生は，学び方を知ることに重点を置き，二年生は身につけた学び方を体験的に学ぶ活動が設定されている。

二年生の生徒は，１年生で追究したことをまとめ・表現する方法を学んだ上で，実際に自分たちが追及したことを地域の方に発信する。このような身近な社会と関わる体験は生徒の意識を学校外へと向けさせており，校内だけでなく地域のボランティアに参加する生徒が多い。道徳授業を行う一ヶ月前には，総合的な学習の時間で三年生が一年間取り組んできた成果を全校に発信する行事が行われている。３年生の生徒は，1年間の長い期間取り組んできた成果が現れており，自分の興味を追求していくことで質の高い作品を仕上げている。３年生は，自分の興味・関心を基に継続して追究して調べたことの成果を，後輩への助言を織り交ぜながら発表する。二年生は自分の興味に合った発表を見に行き，三年生の発表から来年自分たちが取り組む追究について学ぶことができる。２年生の生徒にとって，自分の追究に対する心構えを持つことができ，先輩の堂々とした姿から意欲を喚起することができる行事である。自分の興味を明らかにしながら，自分らしい生き方に対する自覚を深める芽生えとなると考えられる。総合的な学習の時間において，地域の方と関わった体験から得た有用感や発表会の三年生の姿を見て学んだことが，自分の調べたことや興味を通して社会とつながることの価値の自覚を深め，これからの自分の生き方に生かしていける。

道徳授業を行うに当たっては，４節で述べた人間としての生き方を考える道徳の時間で取り上げる生き方を参考にし，内容項目の吟味を行う必要がある。まず，「かけがえのない自分や他者を大切にしてよりよく生きようとすることや，変えようのない状況を前に，自分の生を実現しようとすることを価値として実践している人の生き方」を取り上げることで，困難に立ち向かう心の強さや前向きな心を持つことの価値に触れるようにする。次に，「自分を必要としている物・人・こととの交わりを大切にして生きている人の生き方」を取り上げることで，自分を取り巻く環境と自ら関わり，自分の価値観との交流を大切にする人の生き方から学べるようにする。

実際の指導場面では，ある人が問題に出会ったときの葛藤状態から乗り越えるまでの心情の変化を捉えさせる発問と，その人を支えてきた人々や出会った人との関わり方や心の持ちようを捉えさせる発問を行った。まず，学級全体で，主人公の心の葛藤状態が快方へ向かうまでのきっかけとなった出来事を捉える。留意点としては，辛い状況に共感させる時間を少なくし，客観的な立場で出来事と主人公の心の変化を捉えられるようにすることである。生徒が心情面の共感よりも生き方における価値観を学ぶことを重視している。主人公が変えようのない困難な問題を前にとった行動の意味に注目させ，価値観に迫れる発問をすることで，生徒が生き方の知恵として学べるようにしている。次に，人との関わりを大事にする主人公の姿から，人との関わ

りから学ぶことの価値を深められるようにしている。終末では，生徒に今後の生活で生かしていきたいことについて自分なりに考え振り返り用紙に記入する時間を設けている。

授業の中心発問では，生徒自身がこれまでに困難に出会った経験があれば，このような生き方に関わる価値に対しての自覚を深めることができる。もしも困難なことから逃れてしまった場合には，新たな価値に気づくことができるようにする。このような経験を乗り越えたことがある場合には，より生徒の内面の自覚を促し，人間として価値ある生き方を自分がしていることに対して自信を持たせ，意欲を引き出すことができる。ここで取り上げる価値は，いくつかの道徳的価値を含んだ生き方の価値であるため，生徒にこれからの生活で生かしていけることを気づかるようにすることが大切である。この人はどうして解決できないような困難に対してめげずに立ち向かったのか，その人の生き方を振り返ることで気づける部分があるからである。自分なりに生活に生かしたいことは，生徒によっては思いつかない場合がある。この場合は，授業の道徳的価値について振り返れる質問をし，理解できていなかった場合は今後の指導に生かすことが必要である。

① 主題名

内容項目３－（１）生命尊重

生命の尊さを理解し，かけがえのない自他の生命を尊重する。

関連項目：３－（３）人間の強さと気高さ，生きる喜び

② 主題設定の理由

近年，中学生による自分の命を大切にしていないと思えるようないじめ自殺や，他人の命を自分勝手な理由で奪ってしまう痛ましい事件が後を絶たない。これらの原因として，生活の中で命の重さを感じられる場面が少なくなったことだけでなく，中学生という時期が非常に不安定な発達段階であることが大きく関係していると考えられる。中学生は，自分の生き方について他人や周りの環境から影響を受けながら真剣に考え始める時期であり，学校での友人関係，勉強，家庭環境で悩みながら成長する。そこで，「生命の尊厳に気づかせ自他の生命を尊重する態度を養い，自分の生き方そのものを見つめ直せるようにすること」をねらいとして授業を行う。

③ 資料について

資料名「奇跡の一週間」，甲斐裕美作

資料は，主人公が末期癌と闘いながら精一杯生きようとする姿を描いたものである。余命わずかの一週間，病気と闘いながらも絵を一生懸命に描き続けた主人公の心情を考えることを通して，人間の生命の尊さや，苦しみを乗り越えて生きようとする人間の気高さに気づくことができるようにする。

④ 生徒の実態

中学校二年生で，心身ともに活力あふれ，何事に対しても意欲的に活動する生徒が多く見られる。学級活動では自分たちの役割を理解して自分のもてる力を出し切り，意欲的に活動する姿がある。また，欠席している生徒や体調不良の生徒へ気遣いができる思いやりのある生徒が多い。しかし，頑張る中で困難なことに遭い，自分を周りと比べることで劣等感を抱くこともある。周りと比較することで劣等感が大きくなると，困難なことへ向かおうとする意欲が薄れ，逃れたいという気持ちの方が勝る。その結果，活動に真剣に取り組まなかったり，仲間の弱点を攻撃する言動をとってしまったりすることがある。

⑤ 指導の構想

自分の生活を振り返り，困難なことから逃げているときよりも，立ち向かっているときの方が前向きな気持ちを持っていることに気づかせ，自分の命を大切にして精一杯生きるとともに，周りの人の命も大切にして互いに支えながら生きていこうとする心情を育てる。

⑥ 授業後の振り返り

普段からよく発表する明るい性格の女子生徒Ａは，主人公が周りの人と明るく接する場面の心情を問う場面で，「暗くしていると心配をかける」という発言があった。また，普段大人しい女子生徒Ｂが，振り返り用紙を書くときに，これからの自分の生活に生かしていきたいことについて，「好きなことを見つけることではないか」と，書くことが思い浮かばない仲間に対して話していた。

Ａの女子生徒は，普段の生活から誰に対しても自分から挨拶をできる生徒である。おそらく，今回の授業で主人公が周りの人とのつながりを大事する場面には共感しやすかったのだろう。今後の生活で自分の持っている価値の自覚を深

められているか確認することが必要になる。Bの女子生徒は，三年生になってから，学級に入れず保健室登校をする日が何日かあったが，彼女は学校外で活動する居場所を作っていた。「好きなことを見つける」ことは，彼女の生活の中で常に考えられていたことだったのだろう。やはり，普段から生徒の関心ある問題が道徳の時間に発言として出やすいことがわかった。生徒が今後の生活で自分の生き方を考えていけるきっかけを与えるものになったとまではいえないかもしれない。しかし，これまでの生活体験は個々の生徒の道徳性の発達と密接に結びついているということを確信できた。生徒の今後の生活に意味のあるものとしていくには，継続してその生徒の変容を見ていかなければならない。

生徒の実態を捉えるとき，生徒一人一人の持つ道徳的価値，価値観の把握に努める。生徒の全ての生活を知ることができない。しかし，教師自身が「生き方」の中に含まれる道徳的価値の分析を日頃から行い，生徒の実態把握を継続的に行っていくことが必要である。授業をしてみて，生徒の発言が教師の予想通りであるとは限らないが，そういった発言を記録し，生徒の実態を捉え直すことで，生徒の内面に根ざした道徳性の発達を促すことができる。資料分析では，資料に含まれる内容項目（道徳的価値）についてしっかりと理解しておき，生徒にわかりやすく理解させる必要がある。資料を読んでそこにどんな価値が含まれるのかを，教師自身の実体験と照らし合わせて考え，実感のあるものとして捉えるようにするのである。そうした現実感を生徒に伝えることで，生徒の授業で道徳的価値を考える意欲を喚起できるだろう。資料を通して，授業者と生徒が自身の道徳的な価値観を見つめ直し深められるように工夫する。授業中に，教師と生徒が共に真剣に考えるような雰囲気を大事にし，互いに学びあう意識を持てるようにすることで，共に支えあう道徳性が育っていくだろう。授業の中では，生徒同士や授業者との価値観の交流ができるように，相手の発言を尊重することを大事にし，教師自身が生徒の意見をありのままに受け入れる余裕を持ち，学級全体に広めていくことが大切だろう。もし生徒が道徳的価値について上手く言葉で表現できないときは授業者が代弁し，学級全体に広める工夫をする。生徒自身は日頃から価値について考えているときばかりではない。思いつくことがあってもうまく言葉として出ないときは，教師がその生徒の実態と照らし合わせ，他の生徒の実態とも照らし合わせて理解できるように伝えることで，互いに価値の自覚を深めていく道徳授業となるだろう。

6　体験からの学びに基づく道徳授業の在り方

道徳授業は，他の教科と同じように集団で行われるが，他の教科よりも，生徒個人の発達に資するものでなければならない。そのために，集団として意見が一致することをよりも，一人ひとりが生き方を考えるための指標を持ち，内面の道徳性を伸ばせるように道徳授業を行っていかなければならない。授業では生活体験を広め深めるような道徳的価値を含んだ資料を扱うことが必要になる。また，生徒にとって憧れを持つような生き方に触れさせることも必要である。

近年の生徒たちは，「偉い人になりたい」という向上心を持って努力することができにくくなっている。諸外国と比べて日本の生徒たちは向上心が低い傾向があるというデータもある。周りと合わせて生活することの方が生徒たちにとっては楽である。社会性を身につけることは大事なことであるが，自分の気持ちや考えを出さずに周りと同調することが社会性を身につけることだと考えている生徒は多いのではないだろうか。生徒たちは，集団討論の場で決定したことの影響を大いに受けている。自分の意見を反映させることができ，社会に希望を持って生活ができるようにしていかなければならない。

体験を基にした道徳授業を構想するに当たって，生徒の生活体験を基盤に授業で出会わせる生き方から学べるようにする授業の実践例を述べた。ここでの指導に当たって留意する点を以下に示す。

まず，生き方の目標を考えるきっかけを与え，自分の生き方の指標となる道徳的価値について考えることである。内容項目は，よりよく生きようとするときの手がかり，あるいは指針として一人一人の具体的な生き方の中で考えさせるものになることを目指す必要がある[5]。その際，教師の経験を基にして生き方の中でその価値がどう関わってくるのか分析する。また，それぞれの時間の内容項目は，学級の生徒が生き方と

関わって考える時，新しい価値として自覚できるようにするものか，価値の体験的な理解を基盤にして実践的に身につけるべきものかを判断する。日頃の生活の観察から，その価値に気づかせることが必要な生徒を選ぶ。その生徒の個性だけでなく，体験したことから自覚を深めやすいかどうかを判断して選ぶとよいのではないだろうか。道徳的実践力として身に付けるものの場合，資料で道徳的価値に関わる場面での人間の様々な姿を提示し，生徒自身に問題点を見つけさせ，よりよい人間としての生き方を目指すときに改善すべきことを考えさせるようにする。主人公だけでなく，主人公を取り巻く他の人たちにも目を向けさせ，その場面でのよりよい実践について考えさせ，価値の自覚を深めることが考えられる。

次に，生徒の道徳的心情を生きる力に繋げることを目指す時の留意点を述べる。生徒が自らよりよい生き方を実践するために，生徒の意欲を喚起する目標や目的意識，学習する喜びを見出せるようにする。これまでの生徒の体験から考えさせながら，こういう生き方を目指したいという意欲を持たせるようにしたい。道徳授業では憧れを抱く人物を取り上げることや，自分のよさを改めて見つめ直す活動を取り入れることが考えられる。生徒に達成可能な目標を提示し，それを乗り越えたときが価値の自覚を深めやすい。また，生徒の気持ちを前向きに保ち，「よりよく生きる人間でありたい」という意識を持たせやすくするために，教師の助言や援助は欠かせない。目標と一緒に達成するための具体的な方法を示すことで，目標達成までの見通しを生徒が立てることができ，実行する意欲を持てるようにする。生徒ができたことを認め価値付け，いずれは生徒自身が価値付けを行えるようにしていくことが大切である。

道徳授業の指導案では，ある道徳的価値について身についていない，考えが深められていない生徒に目を向け，その生徒の反応を想定して計画を立てる。このとき，ある価値について自覚が不十分な状況にあるのは，生活体験の不足からなのか，価値は理解していても心の弱さのために実践できないのかなど，その原因と背景を明らかにしておく。体験不足の場合，授業で他の生徒や教師の実感のこもった言葉を聴くことで，道徳的価値に気づかせ，自覚を深めていけるようにする。実践に問題がある場合は，振り返り用紙に書いたことをその後の生活で実践していけているように励まし，価値付ける。生徒の生活体験や道徳的実践力を把握しながら，生徒自身が自ら道徳的価値を生き方の知恵として学び，自分の生き方に生かしていけるようにすることが大切である。

おわりに

以上の考察から，生徒の体験からの学びに基づく道徳授業を計画的かつ系統的に構成することが，過去を振り返るだけでなく将来を見通すことになり，道徳的価値の自覚を深めると共に，人間としての生き方を理解する上でも極めて重要であることが理解されるだろう。この点は，2008年度に改訂された学習指導要領解説の道徳編でも強調されている点であり，今後ますます教育実践を通した検証を行っていく必要があると思われる。

本稿では，筆者（西村）が陽南中学校におけるアクション・リサーチの成果と実際に授業者として行った道徳授業から実証的研究を行い，従来の道徳教育の理論研究とも関連づけながら吟味し，さらにいくつかの新しい提案も行った。この他にも，全国では道徳授業と特別活動や総合的な学習の時間などを総合単元的に組み立てた優れた道徳授業が数多くあるが，本稿ではそれらを十分に取り上げることはできなかったので，今後の課題としたい。そして何より，筆者（西村）自身が今後の教育現場において，生徒の体験からの学びに基づく道徳授業を渾身を込めて行うことを心掛けたいと考えている。

＜註＞

(1) 文部科学省指導資料『学校における道徳教育＜中学校＞』，1968年，51頁。
(2) 林忠幸 編『新世紀　道徳教育の創造』　東信堂，2002年，15頁参照。
(3) 同上書，233頁。
(4) 同上書，235頁。
(5) 金井肇『道徳内容の研究と展開』，明治図書，1989年，13頁。